様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１６６２４

研究課題名（和文）wise self-interestの仏教経済倫理：ダライ・ラマ14世を中心に

研究課題名（英文）Buddhist Economic Ethics based on Wise Self-Interest

研究代表者
辻村　優英（TSUJIMURA, Masahide）

神戸大学・経済経営研究所・ジュニアリサーチフェロー

研究者番号：５０６２４７５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：仏教経済学と西洋経済学は、それぞれ「利己」と「利他」によって特徴付けられ、互いに対立・反目するものであるかのように捉えられてきた。しかし、このような単純な対立構造に集約することはできない。このことを明らかにするために、選択の合理性に着目し、特にダライ・ラマ１４世のwise self-interestを取り上げながら、アマルティア・センの議論との類似性に迫った。自己利益は他者利益の追求のうちにあるというwise self-interestにおける合理性は、理性的精査としての合理性という点において、現代経済学と同じくself-interestの追求を目的とした合理性であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The basic standpoint of Buddhist economics is to criticize Western economics. It is supposed that “self-interest” in the theory of Western economics, regarded as being “egoistic,” is opposed to the Buddhist philosophy of “love and compassion,” regarded as being “altruistic.” I would like to argue, however, that it is impossible to place the two theories into such a simple conflict structure. In this paper, focusing on the rationality of choice, we discuss this question relating to this conflict, and demonstrate a similarity between the theory of rationality presented by Amartya Sen and the theory of “wise self-interest” offered by the 14th Dalai Lama. The rationality in wise self-interest, which argues that the best way to look after self-interests is to take care of the interests of others, is similar to the rationality observed in modern economics in terms of rationality as the use of reasoned scrutiny.

研究分野：宗教学、倫理学

キーワード：合理性　自己利益　wise self-interest　利他　功利主義　仏教経済学　ダライ・ラマ14世　アマルティア・セン

１．研究開始当初の背景
貧富の格差、天然資源の搾取など現代資本主義経済の負の側面を指摘し、警鐘を鳴らした経済学者エルンスト・シューマッハは、資本主義の短所を乗り越える経済倫理を、仏教的理念を基盤にすえて構築しようとした。それが「仏教経済学」(Buddhist Economics) であり、その基本的な姿勢は現在も欧米を中心とする研究者と東南アジアを中心とする社会参加仏教の実践者によって受け継がれている。他方、古典文献（特にインド仏教）に描かれている仏教教団の経済的活動や規範を文献学的に精査し、そのなかから経済に関する思想的側面を炙り出す研究も存在する。その嚆矢ともいえる友松円諦はそうした研究を「仏教経済思想」と名付けた。仏教経済学と仏教経済思想という二つの研究潮流があるなかで、未だ取り上げられていない重要な人物、それがダライ・ラマ１４世である。本研究代表者はこれまでダライ・ラマ１４世の思想を分析し、宗教多元主義思想、政治思想、環境思想において「共苦」(compassion) の概念がその中心的役割を果たしていることを明らかにしてきた。そうしたなかで、彼がアダム・スミスやハイエクに言及しつつ現代資本主義の欠点を補完する経済倫理を模索する発言をしており、wise self-interest という概念を提示していることが明らかになった。しかしながら、それらは他の仏教経済学者のように体系的ではなく、きわめて断片的なものが複数の著作に分散しているにとどまっている。そのため、先行研究においてもダライ・ラマの経済思想をまとめて集約的に整理されたものは未だ存在しない。また、経済学の第一原理は自己利益(self-interest) のみによる選択的行為の動機づけであると言われている。したがってダライ・ラマが self-interest に言及して経済倫理を模索するは必然であるし、アマルティア・センも self-interest に着目してそれを乗り越えようとしていることは注目に値する。ここに、ダライ・ラマとアマルティア・センとの共通点を見出せるのであるが、未だ両者の比較研究はなされていない。

２．研究の目的
仏教経済倫理の現代的展開を、ダライ・ラマ 14 世の思想を中心にアマルティア・センとの比較を通して解明する。特に、選択の合理性に焦点を当て、現代経済学のそれと、仏教経済学におけるそれとの間の共通点と相違点を、自己利益(self-interest)の捉え方を主軸に探る。ダライ・ラマの思想から導かれる経済倫理における選択の合理性は、現代経済学のそれと原則的には同じであり、両者ともに self-interest の追求を目的とした合理性である、という結論が予想される。ただし、ダライ・ラマのそれは wise self-interest と名付けられるものであり、メビウスの環のような構造を有している。

３．研究の方法
①文献収集、②文献読解、③文献のテキスト化、④既存の文献テキストデータベースの利用を通して、第一にダライ・ラマが依拠する大乗仏教の倫理的立場を解明し、第二にアマルティア・センとダライ・ラマにおける合理性概念の解明と比較を行う。

４．研究成果
西洋経済学と仏教経済学を、従来考えらえていたような「利己 vs 利他」という対立構造では捉えられないことを明らかにした。利己的側面を軽視しがちな仏教経済学における選択の合理性理解に一石を投じると同時に、西洋経済学との接点を見出し、西洋経済学の成果を取り入れて仏教経済学を展開する可能性を開くものである。以下で研究成果の具体的内容である、（１）大乗仏教の倫理的立場の解明、（２）合理性概念の解明についての概要と詳論を記載する。

（１）大乗仏教の倫理的立場の解明
＜概要＞ダライ・ラマの依って立つ大乗仏教の倫理的立場を功利主義との比較によって分析し、「最大多数の最小苦」を旨とする消極的功利主義的な立場であることを明らかにした。
＜詳論＞
仏教の重層的側面を功利主義の理論的枠組みで捉えきるには困難を伴うため、Damien Keown、Charles Goodman、Peter Harvey ら仏教倫理学研究者による考察においても、統一的な見解が提示されてはいない。その理論的枠組みは、行為功利主義　(行為帰結主義)・規則功利主義　(規則帰結主義)・消極的功利主義　・人格帰結主義　・遵法主義・反規範主義・状況主義　といったものである。Keown は、仏教の全体的な方向性は消極的功利主義であって、戒と律が規則功利主義的であるから、一見すると仏教は「消極的規則功利主義」に通じていると指摘している。しかしながら、功利主義では帰結主義をとるのに対し、仏教は動機主義であることや、基本的に幸福の最大化原則が仏教に内在していないこと、そして仏教が目的とする解脱は行為の結果を超越（離繋果）しているがゆえに、仏教を功利主義とみなすことはできないと考えている。ただし、世俗における善行が輪廻における苦を軽減する結果をもたらすという意味においては功利主義的だと捉えている。特に、共苦にもとづくならば不善も許されるとする大乗の方便は状況主義であり、アガペー的行為功利主義と捉えている。Goodman は、上座部系の律や大乗の菩薩戒は規則帰結主義的であり、シャーンティデーヴァらにみられる共苦による不善の行使は行為帰結主義であるとする。また、大乗は一般的に人格帰結主義であると捉えている。これらの先行研究は、功利主義の理論的枠組みを複数組み合わせ

て、仏教の多様な側面と比較考察するのが適切であることを示している。
ダライ・ラマによれば、共苦や慈愛を育むことは他者のためにするものというのは表面的な見方にすぎない。「すぐさま直接の利益があるのは他者ではなく自分自身だということである。共苦を実践することによって、他者への利益は 50%しかないかもしれないが、自分へは100%の利益がある」とダライ・ラマはいう。この考えは、例えばツォンカパ『菩提道次第略論』 に見え、人格帰結主義的立場であるといえる。
チベット仏教で実践されている律、『根本説一切有部毘奈耶』によれば、律を守ることによって「十の利益」(phan yon bcu) がある。規則（律）の遵守によって生じる効用が明確化されている根本説一切有部律の思想的伝統はKeownのいう規則功利主義的な傾向、あるいはGoodmanのいう規則帰結主義的な傾向を有しているといえる。
　チベット仏教において守るべきとされる規則の伝統は、具足戒（上座部系の根本説一切有部律）だけではなく、大乗の菩薩戒もある。チベット仏教の菩薩戒には、マイトレーヤ・アサンガ・チャンドラゴーミンと続く唯心流、およびマンジュシリー・ナーガールジュナ・シャーンティデーヴァと続く中観流の２つがある。この菩薩戒は時として具足戒との間に矛盾をもたらすことがある。
『瑜伽師地論』における唯心流の菩薩戒では、殺生や偸盗などのような「性罪であるものを、菩薩が巧みな手段によって行うならば、それによって悪行にもならず、多くの功徳が生じることにもなる」のであって、「共苦の心のみによって命あるものを殺したとしても、それによって悪行にもならず、大きな功徳を増やすことにもなる」とも記されている。これにかんして、ツォンカパは『菩薩戒の解説：菩提正道』 において、チャンドラゴーミン『律義二十』の「共苦をともなうならば不善はない」という言葉を引きながら、菩薩の四十六軽戒に従って、他者の利益のためならば殺生などの悪い行いであっても為すべきであると注釈している 。ダライ・ラマによれば、凶悪な者に遭遇した時、なだめても、何かを与えて懐柔しようとしても、権力を行使しても抑制できない場合、理論的には、共苦から生じる暴力は許されることになる。
　共苦に基づけば元来禁止されている暴力的な不善なる行為も正当化される、という論理は、律に則った規則帰結主義から状況主義的な行為帰結主義へと転換するものである。このような菩薩戒は唯心流だけではなく中観流でも説かれており、シャーンティデーヴァ『入菩薩行論』には、「そのように知って、他者の利益に常に努力し続けるべきである。共苦をお持ちの方が遠くをご覧になることによって、禁止なされたことであってもそれにはお許しになった」とある 。このシャーンティデーヴァの言葉について、タルマリンチェンは『入菩薩行論の解説・仏子の入り口』において注釈し、その具体例として『大乗方便経』に説かれる「大悲のある船長」のエピソードを挙げている。ダライ・ラマはそのエピソードに言及して、次のように述べている。
「釈迦は前世において「大悲のある船長」として生まれた。彼の船には500人の人々が乗っていた。その中の一人が、残りの499人を殺害し財産を奪おうと考えていた。そのような悪行をやめるよう船長は何度も説得しようとしたが無駄だった。船長は499人の命を救おうと思うと同時に、殺人を犯そうとしている者にも共苦の心を抱いた。499 人を殺すという悪いカルマをその者に積ませるくらいなら、自分が一人分の殺人のカルマを背負うことにしようと船長は考えた。そうして船長は殺人を犯そうとしている者を殺害した。共苦の動機によって、彼は殺生をしたにもかかわらず、大きな善行を積んだ」。上座部系文献に現れる同様のエピソードでは前世の釈迦はこの殺人の罪により死後久しく地獄で苦しむことになるが、大乗方便経では地獄に堕ちるどころか、輪廻を滅ぼし捨て去ったとされる。悪行とみなされる上座部系の文献の結末は、遵法主義的な消極的規則帰結主義であるのに対し、善行とみなされる大乗の結末は、状況主義的な消極的行為帰結主義だといえる。
確かに大乗の立場にあるダライ・ラマは、共苦のみにもとづく暴力の行使を理論上認めている。しかし、それは凶悪な者を食い止める非暴力的な方法がない場合に限られている。暴力の連鎖による苦の予測不可能性を考慮すれば、非暴力に徹するのが最善だとダライ・ラマは考える。非暴力に徹する彼の見解は、戒律に則った遵法主義的な消極的規則帰結主義に立ち返ったものではない。暴力の可能性を理論上認めつつも暴力の連鎖がより多くの苦をもたらす可能性を考慮した状況主義的判断にもとづく消極的行為帰結主義であるといえる。
『大乗方便経』における殺人のエピソードは、状況主義的な消極的行為帰結主義であるだけでなく、当事者の自己犠牲がその核心となっていることに着目する必要がある。「大悲のある船長」は自分が一人分の殺人の悪いカルマを引き受ける決意をしている。つまり、船長が犯した殺人は、共苦にもとづく自己犠牲の精神に貫かれたものであって、彼自身の自己利益を実現するための手段ではない。ダライ・ラマによると「幸せを欲し、苦しみを欲さないということにおいて、われわれはすべて等しい。……よって、他者のために自分自身を使うことは正しいことで、自分自身のために他者を使うことは間違ったことである」。この発言は、「少数は多数のためにすすんで犠牲になるべきだ」とするダライ・ラマの見解が、当事者性と不可分であることを示している。ダライ・ラマは、多数者のための手段として少数の「他者」を犠牲にすべきだ

と言っているわけではない。あくまで、少数として犠牲になるのは自分自身である。

自己犠牲の基準にかんしてシャーンティデーヴァは『入菩薩行論』において、「聖なるダルマを行う身体を、ささいなことのために害すべきではない。……大いなる利益を達成するのに与えるべきである」と述べ、行為の効用の大きなこと（公益の効率性が高いこと）に基準をおいている。「苦の最小化」を旨とする消極的行為功利主義に近しい自己犠牲の基準は、『入菩薩行論』の他の箇所や『大乗集菩薩学論』に見え、次のダライ・ラマの発言はその影響下にある。「菩薩の寛大さはもちろん無限の利他主義の一つの例である。われわれは彼がしたように自らの身体や所有物や親族を布施するという実践をすることができない。自分自身の能力だけでなく、自身に対する影響や相手に対する影響、その他の人に対する影響を考慮に入れて布施についてよく考えねばならない」。ダライ・ラマの自己犠牲の基準は、自らの行為の想定される効用を比較検討したうえで、公益の効率性が高いことに置かれている。

ダライ・ラマの思想は重層的であり、大枠としては消極的功利主義および人格帰結主義を基調にしながら、戒律に随う規則功利主義的な側面を保ちつつも、共苦にもとづけば状況に応じて禁止されている行為も許可する状況主義的な行為功利主義的立場を取る。多数者のための少数犠牲の考えは、あくまで少数者としての当事者が自己に課す自己犠牲にもとづくものであって、自己の利益のために他者を手段として利用することを否定する。その自己犠牲の基準は、消極的行為功利主義に基づく公益の効率性であり、いわば「最大多数の最小苦」にある。

（2）合理性概念の解明

＜概要＞ダライ・ラマとアマルティア・センの比較分析によって、両者の合理性概念が、自己中心性だけではなく他者中心性にも立脚するものであることを明らかにし、ダライ・ラマの wise self-interest はメビウスの環のような構造にあることを示した。

＜詳論＞

仏教と経済にかんする研究を大きく二つに分けるとすれば、記述的な研究と、規範的な研究に分けることができる。

記述的な研究としては、仏教経済思想あるいは仏教経済史を挙げることができる。これは古典文献に描かれている仏教教団の経済的活動や規範を文献学的に精査し、そのなかから経済に関する出来事やその思想的側面を炙り出して記述する研究である。

他方、規範的な研究としては仏教経済学を挙げることができる。これは、貧富の格差、天然資源の搾取など現代資本主義経済の負の側面を指摘し、警鐘を鳴らした経済学者エルンスト・シューマッハを嚆矢とするもので、資本主義の短所を乗り越える経済学を、仏教的理念を基盤にすえて構築しようとするものである。シューマッハが名付けた「仏教経済学」(Buddhist economics)、その基本的な姿勢は現在も東南アジアを中心とする仏教者たち（パユットー、スラック・シワラクなど）や欧米の研究者（ブダペスト・コルヴィヌス大学経営倫理センターの Laszlo Zsolnai ら）によって探究されており、西洋経済学が利益最大化・欲望最大化・市場最大化・道具的利用最大化・自己利益最大化によって特徴づけられるのに対し、仏教経済学は苦の最小化・欲望最小化・暴力最小化・道具的利用最小化・自己利益最小化によって特徴づけられている。

「選択の純粋論理」(pure logic of choice) とも言われる西洋経済学の中心となる概念の一つが自己利益 (self-interest) であり、エッジワースによれば、経済学の第一原理は自己利益のみによる選択的行為の動機づけである。従来の仏教経済学の基本的な視点はこうした経済学を批判することにあり、自己利益の追求を主眼とする経済原理が非倫理的であるという主張を暗黙の前提とした上で、慈悲・非暴力・少欲知足といった仏教の倫理的徳目の優位性を説く傾向がある。そこでは西洋経済学における自己利益と仏教的な慈悲が、それぞれ「利己」と「利他」によって特徴付けられ、互いに対立・反目するものであるかのように捉えられてきた。確かに、経済的活動における選択の動機に着眼すれば、このような対立的構図になるのは当然のように思われる。しかし、西洋経済学と仏教経済学はこのような単純な対立構造に集約することはできず、着眼点を変えれば対立構造の中にも共通点が見出せるのではないか。この問題を本研究では、選択の合理性に着目し、「自己利益」に焦点を当てて考察した。

アマルティア・センは、経済学においてこれまで支配的だった合理性の自己中心的な自己利益理解を脱却させようとした。他方で、ダライ・ラマ 14 世は「賢明な自己利益」(wise self-interest) という概念を提唱することによって、没我的で自己犠牲的な動機に偏りがちな理解を脱却し、仏教における利他的な振る舞いを自己利益という観点から捉え直した。アマルティア・センとダライ・ラマ 14 世、この両者において、経済学と仏教における合理性と自己利益の捉え方は対立するどころか、歩み寄っている。もちろんこの両者をもってして、西洋経済学と仏教経済学を代表させるわけではないが、これまで一般に考えられてきた西洋経済学と仏教経済学の対立構造を見直すためのひとつの視点を与えているのは確かである。

アマルティア・センによると、現代の経済学を実質的に支配してきたのは、合理性についての自己利益説であって、合理的な振る舞い (rational behavior) を自己利益追求として理解するモデルは、自己中心的な以下の 3 要素をすべて要請する。すなわち、①自己

中心的厚生（self-centered welfare）：ある人の厚生は（他者に対するいかなる共感も反感も持たず、いかなる手続き的な関心も無く）もっぱら自分自身の消費や、生活の豊かさの他の特徴にのみ依拠している。②自己厚生目標（self-welfare goal）：ある人の唯一の目標は自分自身の厚生の最大化である。③自己目標選択（self-goal choice）：ある人の選択は自分自身の目標追求に完全に基づかなければならない。

センによれば、西洋経済学の合理性に対する二つの中心的な理解（内的整合性および自己利益）のうち、支配的である自己利益追求アプローチにおいては、自己中心的な自己利益以外のいかなる目標追求も理性的な選択として認めない。そこには他者が関与する余地が残されていないわけである。このような合理性の理解は、追求すべき事柄について推論する自由を見過ごすことによって、自由かつ理性的な存在としての「自己」を打ち砕くものであり、社会的な諸関係において生きる人間存在を「合理的な愚か者」（rational fool）に貶めるものだとセンは批判している。

センによれば、われわれは純粋な「ただの私」だけでなく、共同体、ナショナリティ、階級、人種、性別、労働組合員、寡占企業のフェローシップ、革命の連帯など、そうした文脈次第で自分自身を多様に理解し、厚生・目標・行動義務に対する見方を規定する多様なアイデンティティを持ちうる。それゆえ、われわれの振る舞いは、上述の自己中心的な3要素とは異なり、以下のように他者が関与するものでありうるのだとセンは言う。すなわち、①ある人自身の厚生についての観念は、他者への「共感」 を超えて実際に他者と同一化するような形で、他者の立場によって影響されうる。このセンの考えは、彼のいうコミットメント によって自身の厚生を度外視した行為、たとえば自身の危険も顧みずに溺れている人を助けようとするような行為を選択し得ることを意味している。②同様に、目標の到達に際し、ある人のアイデンティティの感覚はかなり中心的でありうる。③私的な目標の追求は、アイデンティティのある種の感覚を持つ集団における他者の目標についての熟考によって妥協させられている。

このようにわれわれの選択的な振る舞いが純粋に自己のみによって規定されるのではなく、大いに他者の影響を受けるものだと考えるセンは、「理性的精査としての合理性」（rationality as the use of reasoned scrutiny）として合理性を規定している。このような合理性は、目標や価値を理解し評価するための推論の使用や、体系的な選択のために目標や価値を利用することを含んでいる。こうした合理性の理解のうちには、自己中心的な自己利益を必須とする理解において排除されていた要素、すなわち他者に関連する目標や価値についての理性にもとづく精査が含まれる。センは、自己中心性だけでなく、他者中心性にもとづくものにまで合理性の理解を拡張したのである。

ダライ・ラマ 14 世の思想において「合理性」（rationality）にあたる概念を見出すのは容易ではない。しかし合理性をセンが言うような「理性的精査としての合理性」と理解するならば、これに近しいチベット語の概念「ナムチュー」（rnam dpyod）を指摘することができる。「ナムチュー」（rnam dpyod）は「ナンパル・チューパ」（rnam par dpyod pa）を短縮した形である。ナンパル（rnam par）は「完全に、詳しく」などを意味し、チューパ（dpyod pa、漢訳では「伺」）は例えば『大乗阿毘達磨集論』において、「意思（思）あるいは洞察（慧） に依存し、個々それぞれを分析する心の声（意言）であって、それは細やかな心である」と定義されているように、「分析・精査」を意味する。本稿ではひとまずナムチューを「理性的精査」 と和訳しておきたい。

ダライ・ラマにおいて、理性的精査に基づく合理的な選択は、自己利益を否定するどころか、自己利益を肯定し、それを達成するためにあるべきだとされる。とはいえ、ここでいう自己利益は、自己中心的な狭義のものではない。ダライ・ラマは自己利益のみを追求するのは「愚かにも利己的」だが、利他の実践者たる菩薩は「賢明にも利己的」であると考えており、他者利益の追求を通して実現される自己利益 を wise self-interest（賢明な自己利益）と呼んでいる。そして wise self-interest は、すでに見たセンのアイデンティティ理解と同様に、他者と相互依存的に関係づけられたアイデンティティによって基礎づけられるものである。ダライ・ラマの wise self-interest は菩薩の行いをモデルにしている。「菩薩」は元来、その前世も含めて「仏陀」となる以前の釈迦を指す言葉だった。そうした菩薩の具体的な言行録のなかから、wise self-interest に基づいた経済的活動における選択を見出すことができる。釈迦の前世譚『ジャータカマーラー』の「長者本生」によれば、釈迦は前世において莫大な財を有する長者だった。彼は自分の幸福のために財産を独り占めすることなく、世間の人々と共有し、困窮者への布施を惜しむことはなかった。あるとき悪魔が彼の元へやってきて財産はダルマの原因であるから、財産を分け与える布施は悪であると言った。それに対して長者は、布施を除いて他にダルマの道はない、と反論し倦むことなく布施に邁進した。釈迦はこうした利他的な選択的行動を取り続けたことによって、最終的に最高の自己利益である涅槃に達したのだとされる。

ダライ・ラマのいう wise self-interest には①内的側面（人格帰結主義的）と②外的側面（行為帰結主義的）の二つを見出すことができる。①内的側面（人格帰結主義的）：ダライ・ラマによれば、共苦にもとづく実践によって、他者への利益は 50%かもしれない

が、自分へは 100%の利益があるのであって、共苦を実践する主たる動機は自己利益にある。この考えは仏典のうちに見出すことができる。例えばツォンカパは『菩提道次第略論』において、布施の完成（布施波羅蜜）は、自らが所有する財産に対する吝嗇（けち）や貪欲といった執着を破るということによって完成するのであって、施し物を他者に与えたことによって他者の貧窮を無くすことそれ自体とは関係がない、と述べている。ここにおける利他的行為（布施）の主眼は実際に他者の役に立てたかどうかということではなく、自分自身の苦しみの原因となる心の状態を克服すること、すなわち人格帰結主義的な自己利益にある。同様の考えは釈迦の伝記『ブッダチャリタ』にも見ることができる。そこには、誰であろうと布施することによって自分自身の執着が断たれ、他者に慈愛の心で布施すれば自身の内にある憎悪と高慢が取り除かれるのだ、と仏陀が説く場面が描かれており、利他的行為によって自己の苦しみの原因となる煩悩を取り除くという自己利益の実現が示されている。②外的側面（行為帰結主義的）：ダライ・ラマによれば、それぞれの共同体が他へ及ぼす影響力が限定されていた過去とは異なり、一地域で起こったことが最終的に多くの他の地域に影響を及ぼすほど緊密に相互依存している現代世界では、自己利益は他者利益の追求の中にある 。他者の利益とまったく関係のない自己利益はありえず、社会的な出来事における他者利益と自己利益は深い意味で収斂するのだから 、利他的な行為が結果的に自己利益を満たすという行為帰結主義的な側面をここに見出すことができる。ダライ・ラマが言うような、他者利益と自己利益の相互依存関係に関連する理論としては、ギャレット・ハーディンが問題提起した「コモンズの悲劇」を挙げることができる。コモンズの悲劇を回避し、資源利用者の「賢明な自己利益」を追求する事例の一つを、14 世紀のチベットにおける政策のうちに見ることができる。パクモドゥ・カギュ派政権の時代に為政者チャンチュプ・ギャルツェンは法令『如意宝蔵』において、「家の亀裂の修理や小舟の作成などをしないわけにはいかないから、無尽資源 、すなわち土地から菩提心　を生じて植樹の管理をしなければならない」として、利他的動機に基づいた植樹による森林資源の維持を「無尽資源」と呼んだ。結果的に森林資源利用者の自己利益が満たされる方法を「無尽資源」は示している。

wise self-interest は、計算高く自己利益になる利他的行為のみを手段として選択するような、一般的な意味での理性の狡知と同じではない。たとえば、『金剛般若経』において「スブーティよ、菩薩は、事物に執着せず布施をせよ。……菩薩は執着せずに布施することによって、功徳の集まりは、スブーティよ、簡単に測り得ないほど大きいからである」と説かれ、ヴァスバンドゥ の『金剛般若経論』において「もし菩薩が布施波羅蜜の結果を追い求めて布施をするならば、それは事物に執着した布施である」と注釈されている。菩薩は、自己利益達成のための手段として利他的行為を選択するのではない。シャーンティデーヴァ『入菩薩行論』の言葉を借りれば、「自他平等」すなわち自他共に苦を欲しないという点で等しいから、利他的行為も目的として選択するのである。表面（利他的行為）を辿っていけばいつの間にか裏面（自己利益）に行き着く表裏一体のメビウスの環に例えることができよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）
①辻村優英、「選択の合理性について: wise self-interest の仏教経済倫理」、『宗教と倫理』、査読有、16 号、2016、33-46

②辻村優英、「ダライ・ラマ 14 世の経済・社会思想」、『サンガジャパン』、査読無、24 号、2016、388-400

③辻村優英、「ダライ・ラマ 14 世における「最大多数の最大幸福」について」、『宗教と倫理』、査読有、15 号、2015、51-64

〔学会発表〕（計　４件）
①辻村優英、「仏教思想の現代的展開―科学・共苦・経済」、南都六大寺聖和会、2017.4.20、唐招提寺（奈良県）

②辻村優英、「慈悲の現代的展開―ダライ・ラマ１４世の思想を中心に」、第１回第２０期全日本仏教青年会理事セミナー、2015.12.4、大念仏寺（大阪府）

③辻村優英、「wise self-interest の仏教経済倫理試論―選択の合理性をめぐって―」、宗教倫理学会第 16 回学術大会、2015.10.3、大学コンソーシアム京都（京都府）

④辻村優英、「ダライ・ラマ 14 世における富に位置づけについて」、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015.9.5、創価大学（東京都）

〔図書〕（計　１件）
①辻村優英、ぷねうま舎、『ダライ・ラマ 共苦の思想』、2016、260

６．研究組織
(1) 研究代表者
辻村　優英　(TSUJIMURA, Masahide)
神戸大学　経済経営研究所　ジュニアリサーチフェロー
研究者番号：50624756